



浸食 01

秘めたる蕾、啄むモノは……。

〳〳登場人物〳〳

一組

佐々木百合子

中倉綾子

柳瀬愛

遠藤滯

二組

今野真奈

深見こずえ

葉山和人

齋藤恵梨香

三組

御崎澄子

小宮山律子

後輩

松島めぐみ

朝の会で配られたプリントには新デザインの水着のモニターについての知らせがあった。モニターになってくれる子には無料で新デザインの水着が進呈される。モニターといっても水着を着て二時間ぐらいプールで泳ぎ、その様子を写真に撮り、使用した感想を伝えること。

沢森明日香は特に興味は無く、モニター希望について「希望しない」を見る。ふと、鉛筆を走らせようとしたところでプリントをもらっている子に気付く。

男子の大半はもらっており、モニターは必然的に希望者から抽選となること。だが、女子の方は？

佐原みなみや斎藤恵梨香、他にクラス委員の高島睦美がもらっている。

対し、萩千夏や御崎澄子、小宮山律子はもらっていない。

他にも何人ももらっていない女子が居るようだけど、共通点は……。

「……？」

明日香は意識せずプリントを見ようと下を向く。プリントを隠すようにしてふっくらしたものが邪魔をする。ふと脇をしめると、それはさらに視界を狭くする。最近性は意識することが多いせいとか、ブラのサイズが合うようになってきた。それを鑑みるとなんとなく理由がわかった気がした。

「ふふ……」

深窓の令嬢と言われる彼女でも貧相なまな板では新デザインの水着に伴わない。他数名の級友たちに差をつけたような気になる。

「佐原さんは水着のモニター希望なのかい？」

「はい……。その、太ってしまったってサイズが合わなくて……。でも新しいのを買うのも定期的に……。それで……」

担任の志垣隆はみなみのプリントを盗み見て話しかけていた。

いらいらする。自分のことを好きと言ったくせに他の女子の水着について口を挟んでいるのだ。担任としてのコミュニケーションといえれば自然な話だけれど、気持ちと身体を重ねたつもりの明日香からすれば面白くない。隆が前の彼女と別れたという話も聞けると見当違いな感想を抱く。

みなみのように胸のデカイ女の方が良いのだろうか？ 自分だって少しづつだが成長している。あんな牛みたいないなデカパイより形が良く、感度だって良い。少し触られたぐらいでもすぐ……。

「……」

嫌なことを思い出す。旧校舎でのこと。隆を待っていたのに、来たのは大輔。関係を疑われて仕方なく身体を許したが、彼は約束を守ってくれているのだろうか？

宿題もプリントも平気で期日を忘れる大輔の日常を見ていると不安。

いや、それだけではない。

大輔は乱暴で欲望のまま迫ってきた。それなのに隆にされた時のように感じていた。気持ち良くさせられ、イッてしまった。

悔しさと悲しさ、快感と欲求を満たす気怠さ。それらが入り混じっていた。

学校へ来るのは少し怖かったけれど、いつもと同じように始り、いつもと同じように終わる。大輔も何かおかしなことをするわけでもなく、自分からも視線を向けない。

まるで無かったかのようにいつもの日々。ただの一つの亀裂も無い。だから、忘れよう。約束を守ってくれているのだ。だから……。

「……」

前に進む。隆との関係も。だから消しゴムを取る。いくら気持ちを重ねていても離れることもある。つなぎとめる為にも丸を付けるべき場所は……。

「お、おはよう、明日香」

プリントの回収で教室がざわつく中、それでも聞き分けられる声に顔を上げる。

「あ、昭利……おはよ。この前はごめんね、先に帰って」

昭利がプリント片手に作り笑いで立っていた。この前の雨の事、彼も気にしていたのだろう。それが顔に出ていた。

「ああいや、いいよ。傘待ってる間に濡れちゃったら意味ないもんな。風邪、引かなかったか？」

「うん、大丈夫。昭利こそ……って、うふふ、昭利の場合は風邪なんて引かないもんね」

くすくす笑いながら昭利の額を人差し指で小突く。

「んっ、言ったなく。お前だって風邪なんてひくのかよ」

「ごーんねん、昭利と違ってバカじゃないし〜？」

「ふん、減らず口だなく」

ほっとした。大輔のことで忘れていたけれど、昭利のことも懸念事項。不自然な下校時間と、不自然な場所での遭遇……。それと不自然な人間の存在。

それらを気にすることなく、いつものように会話ができる……、いや、前とは違う。指でつんと弾いた時、前みたいに恥じらいで躊躇う気持ちが無い。

「あれ？ なんだよ、明日香、水着のプリント……」

希望に丸を付けてしまったプリントはまだ手元に置いたまま。彼の視線は目ざとく丸で囲まれた文字を読んでいた。慌てて隠すも時すでに遅く、昭利は不穩そうに眉を顰める。

「う、うん。水着、古くなったし、もらえるのかなって思ってた……」

「やめとけよ、モニターなんてさ。明日香みたいなちゃんくりんじゃ役不足だろ」

「あー、何言ってるのよ！ 失礼ね。って言うか、役不足の使い方間違ってるし」

「うっせえな。っていうか、こんなデザインの水着、お前には早いっての」

「なんでよ！ あたしだって充分オトナだもん！」

「まだ早いっての。やめとけよ。恥ずかしいだけだっつての」

「うっさいなあ。昭利には関係無いもん！」

「なんだよ、俺は心配して」

「誰も頼んでないし！ っっていうか、たかだか水着じゃないの」

売り言葉に買い言葉、久しぶりの二人の喧嘩に周囲は「仲が良い」と笑っていた。

「だって、こんな胸を強調したような水着……。それになんか変じゃん……」

言葉を濁しつつも彼の言いたいことはわかる。新デザインの水着は胸元と股間にファスナーがついている。胸元を圧迫しない、用便の時に脱がなくて良いというメリットが売りだ。ただ、ファスナーを開けた状態だと胸が強調される格好となる。そして股間のファスナーというもおかしな印象を受ける。

ちよっとした事故で重要な部分が零れてしまうのではないか？ 布一枚で形が見えてしまふのではないか？ という不安がある。つまり、性的に脆弱なデザイン……。

昭利が不機嫌な理由が「明日香が性的な恰好をすること」「だと思いと健気な気もする。昭利が嫌いになったわけではないけれど、今、自分は秘密で隆と関係を強めている。

大輔との一件もあり、これ以上隆に対して後ろめたい気持ちを持ちたくないということもあり、昭利との関わりは控えたくもあつた。

「変じゃないもん。ていうか、古い水着だとおっぱいが窮屈になるんだもん。女子はそういうのあるの。おこちゃまな昭利には理解できないでしょうけどね」

「な……お婆……おっぱ……っつて……」

明日香の口から出たおっぱいという言葉に真っ赤になる昭利。見ると股間が膨らんだような気がする。まだ童貞な彼では女子の口から出るだけでも意識してしまうのだろう。

「ふん、なに真っ赤になつてるのよ。ばっかみたい」

そんな初々しい反応を醒めた嗤いで流し、明日香はプリントを手教壇へと行く。

「はい、先生……」

プリントを向けつつ、手は離さない。隆の瞳をじっと見つめて彼が見返すのを待つ。その小手先の駆け引きに気付いてくれたのか、にこりと微笑みを返してくれる。

他のクラスメートとは違う意味が含まれた笑顔。そう思えた。

「はい、ありがとう。あ、沢森さんもモニターに？ そっか……」

「うん」

いつもと雰囲気を変えて新しいデザインの水着でエッチしたい。最近はこの無沙汰だから、たまには刺激的に攻めてみたい。そんな気持ち……。

「はい、先生、プリント」

そんな気持ちに水を差すようにプリントが押し出される。見ると仏頂面の昭利だった。

「なによ、乱暴ね」

「そっちこそ、ぼーっとしてんじゃねーよ。後ろ詰まってるんだから終わったらさっさと席戻れよ」

「男のヒステリーはみっともないよーだ」

「な、誰がヒステリーなんて起こしてんだよ！」

「昭利じゃん」

正しくは嫉妬。最近、こういう衝突の仕方をしてくる。明日香が隆と向き合っていると、見計らうかのように間に入って今しなくても良さそうな質問をしてくる。

最初は嫉妬して可愛らしいと思っていたが、こう続くと鬱陶しい。嫉妬でうだうだするよくなねちっこい性格だとは思わなかった。こうしてみると昭利も年相応の甘えた狩りのかまってちゃん。少し前まで寄せていた好意もすっかり醒めてしまう。

「ふん。ばっかみたい」

とはいえ教室で変な雰囲気を出そうとすると昭利以外にも勘の良い子に気付かれかねない。隆の立場を考えれば控えるべきと軽く自分を叩いて戒める明日香だった……。

一組の教室ではプリントを受け取った綾子がボールペンで希望しないに丸を付けていた。「ねえ、アヤコー、綾子は水着どうするの？」

柳瀬愛がやってきて間の抜けた声で尋ねてくる。彼女は乗り気らしく、にこにこ笑顔だ。

「新しい水着だって。いち早く着れるのってすごくない？」

相変わらず頭の足りないしゃべり方の愛に頭が痛くなる。けれど、言うことに素直に従ってくれる便利な面もある。

「それに無料だよ？ なんか特別っぽいし、いいじゃん」

言われて無料の文字に気付く。むしろ逆に胡散臭い気がする。

「ふーん、……」

胸元にファスナーのある変わった水着。デザインはあまり良いとはいえない。それを無料でモニターなどと、なにか別の目的があるような気がしてならなかった。

まじまじと眺めると、股間部分にラインが見えた。よく見るとそれはファスナーだった。背中の方からファスナーが下がっていて、それが股間部分まで来ているのかと思っただ、どうも違うらしい。

細かい文字をよく読むと「用を足す時の為に股間部にファスナーを設置しています」とあった。思わず吹きだしてしまふ。これほど余計な機能も無いだろうと。

「……あれ？ 二組って移動教室？」

「みたいだね」

廊下をぞろぞろと行く二組の生徒を見て、綾子はしばし悩む。

最初は興味無かったが、スクール水着をまじまじと見てから、希望するに丸を付けなおし、可にも丸を付けた。

「ちょっと気分悪いから保健室行ってくるね」

「え？ 綾子？」

「岩村には適当に言っといて」

綾子はそう言うと言わずに保健委員に何も言わずに教室を出た。

誰も居ない二組の教室へ忍び込んだ綾子は例のプリントをもらっていいそうな子の机を調べていた。

藤崎成美は モデルを指しており、他の女子に比べてそこそこスタイルが良い。

おそらく彼女も受け取っているだろうと当たりを付けたところ、やはりあった。

彼女は可愛いモノや特別視されることが好きなので、水着のモニターにもしっかりと可にまるを付けていた。

そして真奈の机を調べる。

無造作に入れられているプリントを引っ張りだし、消しゴムを使って消す。そしてペンでしっかりと丸をつけ、二つ折りにしてしまう。ついなので土曜日の補習にも参加させ

ておいた。

「これでよしと」

「仕事終えた綾子はこっそりと教室に戻った。入れ違いで勝行に見られたが、気にせず席に着いた。」

雨の放課後、斎藤恵梨香は腕組みしながら廊下を歩いていた。

その表情は険しく、時折親指の爪を噛み何か思いついたと思うと首を振っていた。

理由はこの前のクラブ活動。

雨のせいでグラウンドができず、体育系に所属している子達はDVD視聴か体育館でのバスケットボールが選択する。

DVD視聴において不健全なタイトルが流れたことに嫌悪感を示した彼女は、遠藤漣を引きずりながら体育館へと向かったわけだ。けれど、そこで後輩の松島めぐみのラフプレーで漣が足首を捻ってしまった。

自分が無理やり誘ったことの負い目と、あからさまな行為に腹を立てた恵梨香は、今日、そのことでめぐみに詰め寄ったのだ。

『貴女ねえ、この前のゲームでわざと漣に足を引っかけたでしょ！』

『は？ なんの証拠があつてそんなこといつてんの？ 意味わかんないんだけど』

『証拠つて、不自然な形で倒れたし……』

『あー、思い出した。あのチビでしょ？ 生意気にちよこまか動き回るんだもん。勝手にコケタンでしょ？ うち、しーらない』

『な、先輩に向かってその態度はなんなのよ』

『一年先に生まれた程度で先輩とか？ あんなチビ、後輩じゃん。つていうか、あんた、うちより背低いじゃん？ それで先輩つて言われてもね〜』

『な……！ 貴女、失礼にもほどがあるわ！』

『年ぐらいしか先輩ぶれるものがないのが悪いんじゃない。つていうか、ふふーん……』
じっと胸元を見るめぐみの視線に気づき、慌てて胸を隠した。

『ブラのサイズあつてくない？ 見え貼り過ぎ』
腰をくねらせ、胸を強調するポーズをして見せるめぐみは高笑いしながらコートへと戻って行った。

残された恵梨香は悔しさに地団駄を踏むほかに無かった。

その結果で今に至る。

何かめぐみをぎゃふんと言わせる方法は無いかと考えているが、繋がりの特に無い恵梨香に良い案も浮かばない。

ただ不機嫌なまま、春先のクマのようにうろろろとするだけだった。

「斎藤さん、ご機嫌ななめのようなね」

すると一組の教室から中倉綾子がやって来る。面識の薄い彼女から声をかけられるのは意外で、一瞬誰だろうと身構えてしまう。

「ああ、ええと中倉さん、んふ……変なところ見せてしまって恥ずかしいわ」

不機嫌を繕い、笑顔で受ける恵梨香。今日の事は彼女も体育館で見っていたので、少し恥

ずかしく思う。

「あの後輩、松島さんだっけ？ 本当に失礼な子よね」

「え？ ああ、そう、中倉さんもそう思うの？」

「ええ。私、あの子に泥水を掛けられてね。それでとても嫌な思いをしていたのよ」

「そうだったの。まったく本当に失礼な子ね。何とかしてやりたいわ……」

他の罪状を知り、さらに真っ赤になる恵梨香。彼女に比べて綾子は冷静さを保っている。

むしろ恵梨香の話に調子を合わせてからかっているようにすら見えた。

「でね、そのことなんだけど、ちょっと悪戯を考えているのよ」

「悪戯？」

「ええ。斎藤さん、新しい水着について聞いたかしら？」

「新しい水着……ああ、デザインが少し変わるとかで、モニターがどうのっていう……」

朝の会で言われたことを思い出す。

水着のデザインが変わるらしく、数人のモニターを求めているとのことで、自分にも案内が来た。同じクラスだと他に佐原みなみと沢森明日香が案内されており、逆に省かれた井上美優がキーキー文句を言っていた。

どういう基準で案内を受け取れたのかよくわからず、水着も今のままで良いと思っていたのでモニターの件は断るつもりでいた。

「その水着であるの松島って子も来るのよ」

「ふうん。それがどうかしたのかしら？」

ブラのサイズをバカにされたことを思い出し、こめかみがひくつく。

「だから、その時にちよつと悪戯をして懲らしめてやろうと思うの。あの子、身体付きに自信があるみたいだから、そこをちよつとね……。斎藤さんもあの子に因縁があるなら、ちよつと協力してくれないかしら？」

「それは……でも……」

水着に細工をするとなるとエッチなイタズラになりかねない。性的に潔癖な気持ちのある恵梨香は抵抗があった。その一方でめぐみにバチをあてる方法など思いつかない。また、反対したところで綾子が素直にやめるとも思えない。ならば参加しておかしな方向に行きそうになったら止めれば良い。そう結論付ける。

「わかったわ。私も協力する」

ニコリと微笑む綾子に任せてと恵梨香は頷いた。

「そう、ありがとう。心強いわ。じゃあ、水着の新デザインのモニターに斎藤さんも参加してくれるわよね」

「そのモニターもしないといけないのね。どうしようかしら」

「大丈夫よ。ただのモニターだもの。水着着て、軽く泳いで写真を撮影程度。何も問題ない健全なことよ」

「そう。そうよね。私ったら変に勘繰っちゃって……。良くないわ。それじゃあね、中倉さん」

恵梨香は頬を搔きながら照れくさそうに言う、苛立ち解消のめどが立ったことからか期限良さそうに踵を返した。

「ふふ……」

そんな彼女を見送りながら綾子はモニター申請用紙に恵梨香の名前を見る。既に名前には申請済みと赤くチェックされており、スリーサイズが記載されている。

76、56、78のサイズを一回り小さく書きなおす。他にも松島めぐみの欄、それから今野真奈に佐々木百合子の欄もやや小さく書きなおした。

新水着は胸元が広がるデザインで胸元を窮屈さから解放する造り。ただ、それ以外のサイズはこれまでとそう変わらない為、もしサイズが一回りでも小さければ当然身体に張り付くこととなる。当然水を吸えば締まりが増し……。

「おいおい、喧嘩でもしたのかよ、昭利〜」

休み時間、窓の外を見ていた昭利に笠原雄太と坂田広樹が話しかけてきた。

「喧嘩ならいつもの事だろ。別になんもねーよ」

「そうか？ なんかいつものじゃれ合いっていうかき、本当に明日香ちゃん、怒ってるって感じしてたしな。な、広樹」

「うーん、そうかなあ……。ああ、でも確かにいつもと違った感じだったかも、沢森さん」

昭利を煽るつもり雄太はともかく、冷静な広樹も同じ方向の感想を抱いている。昭利自身、四月までの仲の良い喧嘩と違う空気を感じていた。

「っていうかき、明日香ちゃん、水着、新しいのもらうんだ」

「ん？ それがどうしたんだよ」

「だってさ、新しい水着ってエッチじゃん」

「は？ 何言ってるんだよ。ばかじゃねーの。ただの水着だろうが」

強気で言い返すも今朝の明日香の「おっぱい」という言葉を思い出し揺れる。新デザインの水着は胸の形を隠さないものであり、つまりは布一枚で裸同然の……服を着ているのに裸同然なはずがないのに、おっぱいの形は他の男子にも見られて……。

自分でも何を考えているのかよくわからなくなり、頭を掻きむしる昭利。

「それにモニター選ばれるのってさ、佐原とかデカパイの子ばっかじゃん。御崎さんは無理だったばいし」

今日も日陰で本を読んでいる澄子。日焼を極端に嫌う彼女は日陰を好む。そのせいもあって女子からはスミッコと陰口を叩かれることもある。

雄太も高嶺の花には手が届かないことを理解しているせい、酸っぱい葡萄よろしく彼女のことを悪しざまに言うことが多い。

「でか……って、明日香は別にそんな胸大きくないし……」

昔、一緒にお風呂に入った時は自分と同じか、多少のぜい肉のつき方のせいで自分の方が大きいくらいだったはず……。だが、最近の明日香はどうだろう。四月の肌寒い頃はぶかぶかのパーカーを着ていたこともあって気付かなかったけれど、温かくなり薄手のブラウスになると確かに大きさがわかるようになってる。佐原みなみと比べれば見劣りするが、少なくとも御崎澄子や萩千夏と比べたらずっと大きい。

「……」

気持ちがおもやする。その原因は……。

「水泳の授業が楽しみなあ……。だって明日香ちゃん、あの水着だろ？ おっぱいどんな形してんのかな。もしかして乳首が見えたりして……」

下心満載の雄太含め男子達の前での水着を着る……。胸がむかむかしてくる。眉間が痛む。いつの間にか険しい顔になっていた。

「昭利君、大丈夫？」

「ん？ あ、ああ……なんでもない。ちよつと気分が悪いから外の空気吸って来る」
「え、今から？ そう。急いでね……」

広樹に短く言うとそのまま走って教室を出る。今、雄太の顔を見てみると、そのまま殴ってしまいそうだから。

「……わっ……」

「きゃ……」

教室を出ようとしたところであの女が居た。綾子だ。

「危ないわね。室内では走らないって習わなかったのかしら？ 全く田舎者なんだから」

「豆腐と一緒に田舎者は足が速いんだよ。すぐ腐る」

「ん？ それってどういう意味？」

豆腐の足の早さにかけて今の自分を言ったつもりだが綾子はぴんと来ないらしい。いまさら自分の冗談を説明する気にもなれず、昭利は強引に話しを逸らす。

「それより三組になんの用だよ。教科書でも忘れたか？」

よく一人でふらついているのを目にする綾子には友達が居ないのだろうか？ 彼女をよく知るわけではないが、あまり褒められた性格でもなく、頷ける。

「おあいにく様。そんなじゃないわ。それより、このクラスで例の水着のモニターって誰なのかしら？」

「！？」

今一番考えたくないことをピンポイントでもってくる彼女に、昭利はかっとな顔が熱くなる。

「ふーん、なるほどね。沢森さんかしら」

「しらねーよ。そんなこと……」

「ふふ、顔に書いてあるわよ」

「怒るぞ」

「どうぞ。優しい優しい昭利君が女の子に暴力を振るえるはずないし？」

冷やかな笑顔を向ける綾子。たまに本気で殴ってやりたいと思う。けれど女に手を上げるのは情けないことと父親からきつく言われており、手のひらに爪を食いこませて耐える。

「ふーん。貴方はどうするの？ 参加するの？」

「？ なんでモニターなんて……。別に水着なんていらないし」

「へえ……。そうなんだ。意外」

よくわからないことを言う綾子に不審そうに問い返すも、彼女も意外そうでお互い相手の真意を測りかねている様子。思考の速度が違うというか方向性が明らかに違うせいもあると、昭利はそれ以上何も言わずに脇を通り抜ける。

雄太といい、綾子といい、とにかく話したくない気分だったから……。

「ふーん……、昭利は結構甘いよね」

そんな背中に向かって綾子はぼそりと呟く。てっきり昭利のことだから明日香が水着の着用を考え直させようと邪魔をするものと思っていた。けれど、それ以上に怒りで我を忘れて前が見えていない様子。先ほど出合いがしらにぶつかりそうになったのも頷ける。

「ま、いいわ。ねえ、笠原君、ちょっといいかしら？」

むしろ不都合な昭利が居なくなることが好都合。反抗的な後輩を教育するには彼のような下卑た男の方が都合も良いのだから……。

木曜日の放課後のことだった。

真奈が鞆を手に帰ろうとしたところ、担任の舘脇真一に呼び止められる。

「今野さん、帰るのかい？ 今日の放課後は体育館に集まるって話だったが」

「え？ なんです？」

「この前のプリントで新デザインの水着を受け取る子はサイズを合わせるから体育館につて知らせたはずだよ」

「わたし、新デザインなんて……否にまるを付けましたよ」

「おかしいな。ちょっと待ってくれ……」

真一は出席簿を開き、プリントの切れ端を見せる。

「ほら、ペンでマルがついてるぞ」

「ほんとだ……でも、わたし……」

身に覚えが無いマルに慌てる真奈。真一も変だと思い、もう一度見る。するとそこには鉛筆の跡があり、まるの形にへこんでいた。

「誰かが書きなおしたのか？ いたずらか。仕方ない奴がいるなあ」

真一は眉間に皺を寄せる。

「とりあえず今野さんは着るつもり無いんだな。じゃあ、先生の方から言っておく。すまんな呼び止めて」

「はい。お願いします……」

ほっと一息つき、鞆を手に帰ろうとする真奈。すると、そこへ綾子が顔を出す。

「あ、良かった。真奈、早く体育館行こうよ」

「え？」

「ほら、今日は新しい水着受け取る日でしょ？ 行かないと」

「わたしは別に……」

「うそ？ 真奈も新しい水着もらえるって喜んでたじゃん。ほら、早く行こう」

「そんなこと……」

言ったつもりは無いが、ようやく気付く。プリントに悪戯をした犯人は綾子だ。だから知っている。だが、犯人だからとて、何もできない。

プリントの件は生真面目な真一に言えばこの場のみなんとかできるだろう。けれど、その後はどうだろうか？ 彼が居ないところで起きたらどうなるだろう。その時に綾子の不快を買っていたら……。

「どっちなんだ？」

「えと、はい、そうでした。わたし、新しく水着もらえるから、最初はお金かかると思っって、だけど、無料って聞いて、それで……書きなおしたんです」

「……そうなのか？」

真一は疑り深く真奈を見るが、彼女は愛想笑いを返す。

「そうですよ。それに真奈はおっぱいが大きくなって古い水着だときついんですって」
「おば……う、うむ……まあ、そういうこともあるか……うむ」

唐突に出たおっぱいという単語に面食らい、一方で年頃の女の子の成長を考えれば古い水着で不自由することも大変だろうと無理やり納得する。

「真奈が変なこと言い出したから心配しちゃったよ。ほら、行こう」

そう言いながら綾子は真奈の腕を取り、逃げられないようにしていた……。

体育館に向かうと、各クラスの女子が十数名居た。ステージではカーテンが降りていて、その向こうに誰かいるようだ。

他に学年主任の篠田信行が段ボールを抱えている。体育会系の彼は身体も大きくがっしりしており、乱暴な面もあるが明るく生徒受けは良い。

「お、集まったか。それじゃあ皆に水着を配るからな。あと、後日パンフレット用に撮影もあるから、それは今度追って連絡する」

プリントを読み上げ、注意事項をいくつか読み上げる。

「サイズは今年の身体測定を基準にしてある。間違えないように持っていくように」

「はい」

S、M、Lと書いた段ボールの前に並ぶ女子達。それが全員にいきわたったところで、帰ろうとする。しかし、信行が呼び止める。

「それじゃあ、モニター用の資料を作るから、皆順番にステージに上がって身体測定してくれ」

「え？ また身体測定するんですか？」

「ああ。どれぐらい差がでるかとかを確認したいんだとき。大丈夫、ちゃんと専門の人がしてくれるからな」

笑いながら資料に目を落す信行。それと入れ替わりでカーテンからメジャーを持った女性が顔を出す。

「それじゃあみなさん、一人ずつ順番にお願いしますね。あと、これまで着ていたスクール水着をお預かりしますのでよろしくお願いします」

「スクール水着を預かるんですか？」

「はい、実際に着ていた水着とのサイズをチェックして伸縮の目安にします。その代わりに新しいデザインの水着は差し上げます」

女性の返事に愛は笑顔で頷く。

「わかりましたー、それじゃぱっとお願いしまーす」

愛は手を上げてそそくさとステージに登っていった。

ステージ上では衝立があり、カーテンとで複数にパーテーションが区切られていた。愛に続いて三組の佐原みなみもやってくる。

みなみは胸が大きく、それを横目に自分のをおさえる愛。彼女にも相応のプライドがあり、そこそこの大きさの胸に自信がある。けれどみなみには大差で負けており、悔しい。

「それじゃあサイズを測るから、各ブースに一人来てね」

女性に促され、愛が一番乗りで行く。

「一旦裸になってもらいたいけれど、いいかしら」

「ええ、裸ですか？」

「水着を着る前と着た時のサイズも計りたいの。女の子の身体のラインって複雑だから、お願いね」

「はい……」

裸になるのは嫌だけれど、あくまでも数字だけのこと。少しの我慢、それも同性の前と割り切り、新しいデザインの水着の為と頷く。

「それじゃあ、バスタオルを置くから、着替えたら身体に巻いて、それから呼んでね」
全くのすっぱんぼんで測定されるわけでもなく、相手は女性。周りはカーテンに仕切られていることもあり、愛はほっとしながら服を脱ぎ始めた……。

隣のパーテーションでは一つ下の後輩、松島めぐみも服を脱いでいた。自分の身体にそれなりの自信をもっている彼女。形の良いおっぱいはグレープフルーツが二つ並んでいるよう。上を向いており乳輪も大きくなく小さすぎず、色も明るい桜色。スタイルを維持するために運動をして引き締めているから、くびれや丸みだけなら隣で裸になっているのみより良いはず。

その割に男子からの人気が低い。

瞳は少し気が強そうなつり目がちだけれど、鼻も高く、髪型も田舎の村にはおしゃれに整えている。肩にかかる程度に整え、小物で片側を留めている。

黙っていれば十分美人なのだが、その黙っていることができない。そのせいで敬遠されているのだが、彼女はその自覚だけが無い。

「ふう……」

青と紫のチェックのパンティを脱ぎ、ふさっと生えた陰毛を晒すめぐみ。そのまま捨てるのもだらしなので、畳んではカゴに入れる。

オシロをステージのわきに向けるようにしたとき、何か物音が聞こえた気がする。機械的なものが滑る音……。

「なに？」

きよろきよろと辺りを見回すと、それに応じておっぱいが左右に揺れる。それがなんとなく痛いのでおっぱいを抱き寄せ、バスタオルを巻く。反対側ではカーテンを挟むようにふわふわしたモップのようなモノが並んでいた。

「……」

高嶋睦美は安易な気持ちで面倒くさいことになったと少し後悔していた。世の中タダでもらえる巧い話も無いと思いつつ、上着を脱ぐ。

去年の冬から少しずつ大きくなってきたおっぱいは動くときに面倒臭い。最近ではブラジャーを別途つけないといけないので、それも嫌だった。

二月までは手に収まる程度だったが、最近は少しはみ出る感じ。そのせいで去年までのスクール水着がきつかった。だから今回のモニターに応じたのだ。

凛とした雰囲気、気の強そうな瞳、黒縁の眼鏡のせいで普段から女子という印象の薄い彼女だったが、この水着を着てしまうと周りも意識を改めるかもしれない。それは良い事なのかよくわからなかった。

「……？」

ステージ横、放送機材のある方を見る。ガラス戸の向こうから何か光ったように見えた。なんだろうと思いつつも、向こう側は暗くてわからない。

「高嶋さん？」

すると女性に呼び止められた。

「あ、はい」

「そんな恰好でうろろしない方がいいわ。女の子なんだしね」

笑いながらバスタオルを渡してくれるので、睦美も真っ赤になってしまう。今、自分は靴下と上履きだけというハレンチな恰好でうろついていたのだ……。

十

放課後の校庭でサッカーをしていた高尾春樹は、大きく蹴られたボールを拾いに体育館の裏の方まで走っていった。

茂みに隠れたボールを拾い、投げ返すと、代わりにポケットから家の鍵が落ちた。

「おい、春樹！ 早く来いよー」

「すまん！ 鍵落した。探してるからお前だけでやっててくれー」

「なんだよ、大丈夫か？」

「大丈夫、すぐ見つかるって」

急ぎ鍵が飛んで行った方向を探すと、鍵はすぐに見つかった。

「よかった……あれ？」

鍵を拾ったところでふと体育館から人の気配を感じる。この時間に誰だろうと思いつつ、がたつく通気口から覗き見る。

「……え」

すると学年の女子達が数名いる。百合子に真奈に直美、スタイルの良い女子が多くおり、

何かを待っている。ステージにはカーテンがしいてあり、そこへ向かって愛たちが上がった。手にはビニールに入った布のみ。

気になり始めた春樹は、ステージ下の倉庫に続く扉へ向かう。鍵はかかっているが、たてつけが悪く、門の上と下をねじるように力を加えることで隙間ができる。そこから手を入れて鍵を外せばいつでも入れる造りとなっていた。

「なにしてるんだろ……」

好奇心に息を殺し侵入する。するとステージ脇の部屋から誰かの息遣いが聞こえた。

——誰か居る？

這いつくばりながら移動し、板の隙間から上を見る。穴を広げようと落ちていた釘でぐりぐり回すと、よく見えた。

眼鏡をかけた男が居たが、見覚えが無い。先生ではない。ならば誰だろう。

その男は三脚の上に何かを乗せており、それを四つ並べていた。それらは全てステージの方を向いていた。

運動会や学芸会で使うカメラより大きく、それぞれ赤く光っていた。

何かを撮影しているのはわかった。

その穴からは他に見えるものが無いので逆側の小部屋へ向かう。そちらには誰も居ないが、代わりにふわふわの羽根がついたマイクが四つ並んでいた。それもカーテンに向かって伸びており、音声を拾っている。

——なんだこれ……。

何をしているのかわからず、春樹はステージの裏側の通気口へと向かう。そこからは上へ登れるハシゴがあり、ステージを照らすライトを操作できる。設備が古いので手動で、去年、一度扱ったことがあった。

「よいしょっと……」

ハシゴを登り、天井付近へ上がる。相変わらずカーテンが邪魔をしていたが、上から覗くことができる位置だった。

「89、88……くらいかしらね」

数字を読み上げる声が聞こえたので、こちらへ視線を落とす。するとそこには睦美が居た。彼女は女性の前で胸を晒し、メジャーを巻かれていた。

身体測定なのだろうか。

そんなことはどうでも良い。今は目の前で上半身裸を晒すクラスメートの方が重要だ。

普段はきつめな睦美がおっぱいを晒している。糞真面目な眼鏡のせいであまり意識していなかったが、いつの間にか育っていたおっぱいにどきどきした。

さらに今度は後ろを向き、お尻を測られる。

「86……ね」

オシリは結構大きいのだと知り、少し笑いたくなる。

その白いオシリにうっすら見える割れ目。オシリの穴が見えるかとも思いつながら目を凝

らすと、薄い陰毛が見えた。

——へえ、委員長、アソコに毛が生えてるんだ……。

自分の股間をこっそり見ると、少し髭のようなものが見えた。まだ生えていない陰毛に負けたような気がした。悔しさ半分、仕返しに彼女の裸を目に焼き付けてやろうと変な復讐心が芽生える。

——委員長、おっぱい大きいなあ……。触ってみてーなあ……。

ぼんやりしながら見ていると、いつの間にかチンポが大きく固くなっていた。最近よくなってしまう勃起という現象。エッチなことを考えているのがまるわかりで恥ずかしくて仕方ないのだが、今は自分一人だから気にしない。チンポを大きくしたまま、猥下を楽しんでいた。

「ええ、ここで脱ぐんですか……。」

荻原翼は驚きを隠せず声を上げた。

「ええ、お願いできるかしら。被服の寸法を取るのって難しいの。協力してくださいね」
年上の女性に丁寧に頼まれると断るのは気が退ける。

「ごめんなさいね。他の子はもう終わってるけど……。」

愛や睦美が先ほど出ていくのが見えた。能天気な愛は参考にならないけど、睦美は少しむっとしていたのだから、彼女もこの恥ずかしい事に堪えたのだろう。

たかが測定なのだし、ここはカーテンで区切られている。そこまで意識する必要も無いと、覚悟を決める翼。

「はい、わかりました。」

トレーナーを脱ぎ、ショートパンツを脱ぐ。少しよれ気味の黄色いパンティとB+カップのブラジャー姿になる。今日は体育があったから少し湿っていた。

翼はパンティを脱ごうと足を上げると、よろけて倒れてしまう。

「おわっと……あなた……。」

ドジなことに転んでしまい、慌てて立ち上がる。半ば自棄になりパンティを蟹股で脱いだ。

まだ陰毛が薄い翼の股は、蟹股開きになると割れ目が少し広げられてしまう。初々しいピンクがステージ奥の窓で反射していた。

続いてブラジャーを取ると、小さいながらもぷるんと揺れる。内向きにミカンとリンゴの間ぐらいの大きさのものを並べたようなおっぱいが一丁前に揺れる。そこにちよんっとのっかる乳首。乳輪が大きい感じがしてコンプレックスがあった。

「じゃあ、お願いします。」

「はい……。」

カーテンから女性がメジャー片手に来て、一瞬驚く。女性はカゴにあったバスタオルを

見つつ、言葉を飲み込み、翼の胸にメジャーをあてた……。

全裸ではない。髪留めと靴下、上靴だけは身に着けている。ただし、パンティもブラジャーもなく、おっぱいも股座も隠していない。

薄い陰毛とちよっぴりおおきな乳輪。うっすらと日焼けの残る肌は健康的な美少女のものであった。

「それじゃあ、ちょっと前傾姿勢になって……、あと足を開いて……そう。あの、腰を曲げる感じのストレッチして……」

女性の指示に従い、翼は前のめりになる。そのまましゃがまされ、お尻をくいと持ち上げよう促された。

「荻原さんは身体が柔らかいのね……猫みたい」

「そうですか？」

「ええ。凄いわ」

褒められたような気がして少し誇らしかった。

「それじゃあ、そのまま立ち上がってね。水着に着替えてください」

「はい」

立ち上がり、逆向きに腰を逸らしてから新しいデザインの水着を取り出した……。

学校でバレエボール部に所属している春樹は背丈のわりに目立たない子。長身を買われてバレエを始めたは良いけれど、最近は女子バレエ部の練習に付き合わされることが多い。

ただ、おかげで女子の体操着姿を見たり、ときおり裾から覗ける部分を楽しむことができた。

そんな彼だが、翼のあられもない姿を見てどぎまぎしていた。

一組で石川拓馬や飯倉徳夫と幼馴染な彼女は、時折試合の時に来て二人を応援しているのを見たことがある。自分はバレエ部女子に雑用を命じられ、ボール磨きばかりだというのに……。

二年前なら気にしなかったけれど、最近はそれが癪に障る。

翼はショートカットの似合う可愛い子。瞳が丸く山形の扇形でいつも笑顔の印象がある。他の女子に比べても人当たりが緩くて感じの良い子。

もしかしたら彼女が好きなのかもしれないと思った。けれど、徳夫や拓馬と自分を比べるとスペック的に勝てる要素が無く、ハードルが高すぎた。

いつの間にか憧れのまま、諦めていた。

そんな彼女が、猥下で裸になるうとしていた。

何度か目をぱちくりしてから皿のように開き、息を止めて下を見る。

彼女は驚いていたが、すぐに頷き、下着姿になった。

健康的なスポーツ少女らしい小麦色の肌と白さの残る裸体。パンティを脱ぐときに転ん

だのが笑いを誘うが、ぐっとこらえる。そして微かに見える薄い陰毛の間のスジ。あそこが翼の大事な場所。一瞬とはいえ、見たという事実が胸を高鳴らせた。

そしてブラジャーを取ると、他の女子に比べると少し小さいおっぱいが見えた。色は白くて、乳輪が少し大きい。乳首はかるうじて見える程度の大きさだった。

……………！

股間がぐんぐん大きくなるのを感じる。どくんどくと脈打ち、とめどが無い。

鼻が詰まっており口で呼吸していた。

そして胸とおしりを計測されていた。

78、76という数字はそう簡単に忘れられそうになかった。

気持ちを落ち着かせ、大きくなったチンポを宥めるように摩る。すると妙な興奮が起こり、変な息苦しさが芽生えた。

——なんだ？ これ……。

思わずそのままチンポを弄りつつ、翼を見下ろす。

彼女はお尻を上げたまま、上半身を倒していた。

「翼のお尻……」

自分の方に向けられた翼のお尻。みなみや睦美と比べて小さいけれど、可愛くてキスしたくなる丸みと白さがあった。

そこに少し濃くなった部分がある。その下にはやや茶色がかったラインが伸び、薄い陰毛が見える。

皺の集まるオシリの穴と、肌色が濃くなった感じの割れ目が見えた。それは翼が足を開くたびにだんだん大きくなり、内側が覗けてくる。

「……………！」

肩幅より大きく足を開いた時、割れ目が少しだけ開き、違う色が見えた。

同時にチンポがすぐく固くなる。ぎゅっとなつかむ。強く擦ると快感が強くなり、何か出そうになったのを我慢できなかった。

「うう……………うう」

ズボンの中で暴発するチンポ。びくんっ！ と強く跳ね、何かがびゅっと吐き出される。

我慢しようにも身体が言うことをきかない。同時に身体に走る快感。初めての体験に、春樹は天井裏で横になり、悶えていた……。

十

「さ、真奈も行こうか」

「うん……」

綾子は真奈の背中を押し、ステージへと昇る。

パーティーションは区切られていたが、綾子はそのまま真奈の背を押し入る。



「あら、一人ずつよ」

「ごめんなさい、真奈さんが不安がってたんで、「一緒に来ちゃいました」

明るく言う綾子に女性は耳に手を当てて首を傾げる。

「そう、まあいいわ。じゃあ、先にどちらから測定するのかしら？」

「それじゃあ真奈、あたしが見ててあげるから、頑張って」

「……」

綾子に突き飛ばされる感じで背中を押される真奈。しばらく固まっていたが、綾子の笑顔を見るとだんだん怖くなり、背を向けて服を脱ぎだす。

「あーん、真奈ってばおっぱい大きいねえ……」

グレーのスポーツブラに窮屈そうに閉じ込められたいるおっぱい。綾子は後から羽交い締めにして捲りあげる。

そして下からおっぱいを揉み上げ、左右に乱暴に回す。

「やん……ちよっと、変なところさわらないで……」

「ええ、いいじゃない。女同士だしさ……、他に誰も居ないよ」

そう言いながら綾子は真奈を押し。そのままステージ脇の小窓の方まで押し、壁に手を着かせる。

「そういえばおっぱいのサイズ測るんですよね？」

「ええ……そうだけど……」

綾子の突然の行動に女性は呆気に取られていた。言われてメジャーを伸ばし、真奈のおっぱいを測る。

「88かしら……」

「だめだめ、真奈は見ての通り乳首が陥没してるからさ、こうやって揉んで出してあげないとね……」

「ちよっと、やめて……んっ……」

おっぱいを揉みしだく綾子に真奈は苦しそうに呻く。そこにだんだんと上ずった声が混ざり始め、鼻息が荒くなってくる。

「んう……んっ、んっ……ふう……」

真奈の視界がぼやけ始めた頃、乳首がぷくっと立っていた。

「ほら勃起した。いやらしい身体だね、真奈 ってさ……」

生徒にしては大きい真奈のおっぱい。先ほどまで陥没していた乳首が興奮と快感で勃起してしまい、汗ばみ始めていた。

「さ、早く測ってくださいよ」

「え、ええ……。えと、90……91かしら……お、大きいわね。いえ、なんでも……さ、て、それじゃあ次はお尻……」

「おしりだってよ、真奈……さ、そっちに手を着いて……」

真奈は言われるままに床に手を着き、おしりを上げる。その先はステージ脇の窓の方。

「ちよっと足を開こうか？ ね……」

ぐいっと足を開かせると、大きくて丸い尻がハート形に歪む。それに応じてオシリの穴も横に広がり、さらに割れ目もゆっくり開く。

「もっとう、開こうか……」

綾子は真奈の陰唇付近に指を伸ばし、ぐいっと開く。

「やめ、止めて……」

「なんで？ オシリ測るんだから仕方ないじゃない。ねえ……」

「え？ あ、ああはい……」

突然のことにわけがわからなくなっていた女性だが、髪をかき上げるようにして耳を押えた後頷いた。

「えと、それじゃあ、測ろうかしら……」

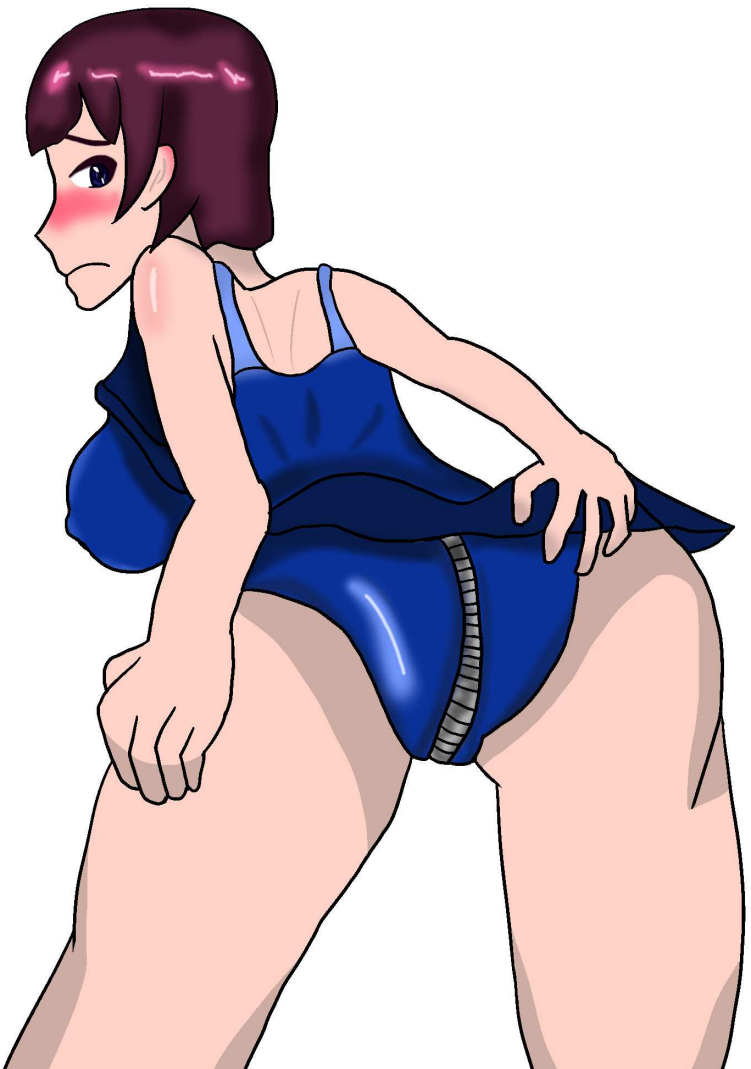
また邪魔と言われないように側面に立ち、メジャーをあてがう。

「89……くらいかしら……」

「ええ、もうちよっと大きいと思ってたけど違うんだ……。ねえ、こうしたら大きくなったりしないかな……」

「え！？ ひゃん！ ひいん……ああん」

オシりを撫で回し割れ目付近を指でかすかに触れる程度になぞる。すると真奈はその感



触に驚き、快感の声を上げていた。

「あはは、変な声出して……どうしたの？ 真奈……」

汗ばみ始めた割れ目綾子はメジャーをあてる。そして押し付けるようにしたあと、ぐいぐいと前後に擦る。

「やだ、痛いってば！ やめ……んっ……ああん……んああ……」

最初は突然のことに痛みがあったが、メジャーが愛液で濡れて滑らかになると、すぐに上ずった声が変わった。

「やめ……止めてよ、綾子……ねえってば……んっ！ あはあん……」

「どうしたの？ 変な声だして、お姉さん、困ってるよ……。真奈がちゃんとサイズ測らせてくれないってさ……」

「そんなこと……だって、やめて……んっ……はあん……」

マンコをぬるぬちゅと刺激され、真奈は嫌がりながらも身体が反応してしまう。

周囲に酸っぱい臭いが漂い始めたあと、しばらくねちやねちやとマンコをいじくられる真奈。

「ん、はあん……んっ……んっ、んっ……ああはん……」

膝を着き、お尻を上げる恰好の真奈はまるで発情期の雌猫のようだった。

メジャーで刺激された真奈のアソコは赤く充血していて痛々しいが、奥から溢れる愛液が彼女の得た快感を物語る。

「んう……くう……くっ……うふうん……はあはあ……つく！ はあ……あつ、ああ……」

しばらく緩い快感が続いた後、真奈はお尻を突きあげ、低く呻き、倒れた。

「あらら、どうしたのかしら……もう、真奈ってば変な子なんだから」

綾子はそう言いながら胸元のペンを取りだし、真奈の顔に近づけていた。

「なんかここ臭いし、隣で測ってもらっていいですよね？」

「え？ あ、うん。どうぞ……」

空気と化していた女性は綾子の言葉に慌てて頷くと、タオルを手に倒れたままの真奈のマンコを拭いてあげていた……。

十

小さくなったはずのチンポがまたも大きくなっていった。パンツの中はねっとねとで気持ち悪いけれど、ステージで起きた真奈の痴態に春樹のチンポは再び先ほどの固さを取り戻していた。

——なにしてたんだ……。っっていうか、真奈、すげえエロインじゃね……。

ごくりと粘っこい唾を飲み込み、チンポを掴むか悩む春樹。その隣では綾子が裸になっていた。

おっぱいは真奈ほどではないけれど、そこそこ大きく、おしりも丸くてエッチな身体付き。さっきの真奈のように割れ目付近にメジャーをあててコスコスしたら彼女もああなるのだろうか？

他の女子はどうだろうか？ 試してみたい気がした。してみたい。誰でもいいから……。

そんなことを思いながら、春樹は天井裏から出ることにした。

途中、誰かが居たであろう場所へ行くと、男の声が聞こえた。

「なんかスゲーもん拾っちゃった……。っっていうか、ワザとっばいと売り物にならないいかもしれねー……。ま、他の子も可愛いし、十分か……」

売り物という言葉が気になったが、それを確かめる術は春樹にない。それよりも、真奈の性的な乱れっぷりと翼の可愛いアソコを見れたことが何よりの収穫だ。

しばらくチンポが大きくなる日が続きそうに困るけれど……。